浦添ようどれの石棺にみられる建築表現と王陵の変遷

THE DEVELOPMENT OF IMPERIAL MAUSOLEUM OF THE RYUKYU DYNASTY, URASOE YODORE: ICONOLOGICAL ANALYSIS OF SCULPTURES ON THE STONE COFFINS

高屋 麻里子*
Mariko TAKAYA

Urasoe Yodore is known as the oldest imperial mausoleum of the Ryukyu Dynasty. The mausoleum has two tombs, "King Shonei's tomb" and "King Eiso's tomb". There are stone coffins, sculptured in the form of buildings.

From analysis of the architectural sculpture on the stone coffins, they can be dated to around the Kamakura period. The coffins are sculptured in the form of the interior of a hall of Buddhist stupa or temple.

The construction of Urasoe Yodore is divided into 3 periods.

Architectural characteristics appeared on the coffins show influences from China, Korea and Japan.

Keywords: Urasoe Yodore, Ryukyu Dynasty, Stone coffin, Relief sculpture, Kumimono, Buddhism image

浦添ようどれ、琉球王朝、石棺、彫刻、組物、仏像

1. はじめに

琉球の王陵は、第二尚氏の造営による玉陵(たまうどうん)が知られているが、第一尚氏以前からの造営と考えられている王陵が浦添ようどれである。浦添ようどれには二つの墓室があり、それぞれに王の名が冠されている。東側が第二尚氏第七代の尚寧王陵とされる。西側は、第一尚氏以前、擦度王統の前、1299年に浦添極楽山に葬られた英祖王の墓と伝えられ、英祖王陵と呼ばれる。

浦添ようどれには、四基の輝緑凝灰岩製大型石棺、二基の小型石棺が現存している^{※1)}。また、近年の発掘成果により、英祖王陵内に建物礎石とみられる石が配されていること、高度な加工がされた金具、高麗系瓦などが発見され、戦前まで知られていた形態が本来のものではなかったことが判明している^{※2)}。

しかし、浦添ようどれの変遷過程を示す史料としては、発掘成果と石棺、浦添ようどれに残る尚寧王が作成したとされる碑文に限られている。また、第二尚氏時代以前の建築で、現存している遺構は知られていないので、浦添ようどれの石棺は、現存知られているなかでは最も古い時代に属する建築史料でもある。本論文では石棺の建築表現からこれが製作された時期を考察し、浦添ようどれの変遷を明らかにすることを試みる。

浦添ようどれの石棺と王陵に関しては、2003年9月に写真記録

と英祖王陵内の実測調査を行い、他の王陵に関する見学調査は2004年3月に行った^{※3)}。1973年の又吉真三氏の実測調査記録^{※4)}を用い、その他の石棺については『重要文化財 玉陵復原修理工事報告書』^{※5)}を史料とする。

2. 浦添ようどれの石棺

2-1. 建築史料としての石棺

彫刻や陶製家型模型などから、現存しない建築の形態を得る試みは、例えば中国古代の木造建築の痕跡を求めて広く行われている。特に、漢代の副葬品として知られる明器などが、古代の木造家屋の形態を知る手がかりとされている。また、石窟寺院などに残された、木造と考えられる部材表現などから、該当する時代の木造建築の形態を推測し、日本の同時代の建築への影響も論じられている^{※6)}。

また、日本では石造の家型墓標などが、日本海側各地に分布していることが知られてはいるが、独立した建築物としての扱いにとどまり、現存する建築との関係を広く論じられてはいない^{※7)}。石造家型石棺に対しては主に彫刻表現や工芸品、美術品としての価値に関心がむけられ、建築表現が論じられることは少ない。

2-2. 石棺の建築表現と表現対象

* 千葉大学大学院自然科学研究科人間・地球環境科学専攻
博士後期課程・修士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Chiba University,
M. Eng.

表1 浦添ようどれ石棺トレース図一覧

浦添ようどれをはじめとする石製蔵骨器については、形状から石厨子と表記されることも多いが、本論文では、厨子が仏舎利容器を指すこと、後に仏堂内で仏像を納めるものを指すことから、区別する意味で棺ととらえ、石製のものを石棺と表記する。

浦添ようどれの石棺名称は、英祖王陵内の1号から3号、尚寧王陵の4号から6号とする⁸⁸⁾。図1に尚寧王陵と英祖王陵の平面図と石棺の配置を示す⁸⁹⁾。このうち、中国福建省産の輝緑凝灰岩製石棺は1号から4号である。石棺の表現の不鮮明な輪郭を把握する目的で、写真から描きおこした図に画像処理を行い、写真による歪みを修正し、トレース図を作成した⁹⁰⁾。表1に1号から5号石棺のトレース図一覧を示し、順に石棺の棺身の概要を述べる。

1号石棺の規模は他の石棺と比較して大きい。四隅に柱が表現されているが、組物などの表現はみられない。柱は丸柱で、礎盤の表現は張り出しが小さい。柱頭にも装飾がみられる。また、柱には浮き彫りが全体に施されている。

2号石棺と3号石棺では、四隅の柱から挿肘木とみられる部材が梁、桁のそれぞれの方向に彫られており、二手先とみられる表現となっている。四隅の柱は全て丸柱で、柱には浮き彫りが全体に施されている。柱の浮き彫りは2号と3号では一致する部分もあるが、細部に違いがみられる。礎盤は張り出しが小さい表現である。組物は2号石棺も3号石棺のいずれも四面全てにみられる。

図1 浦添ようどれ墓室平面と石棺の配置

4号石棺には、四隅の柱と頭貫が表現されるが、組物の表現はない。柱頭にも装飾がみられる。柱は丸柱で、柱には浮き彫りが全体に施されている。礎盤は張り出しが小さい表現である。

5号石棺は、四隅に明らかに組物と考えられる突起が表現されている。調査時の観察と写真記録では突起部の細部が摩耗し、不鮮明であったため、トレース図では1972年の調査記録図面と比較し組物の形態を復元している。組物は木鼻、大斗、肘木などが表現されている。桁行方向、梁行方向共に肘木と肘木の材端が柱の上部から突出している。

6号石棺は、最も小さい。装飾も屋根に施された線刻のみで、建築的な表現が最も少ない。屋根は宝形造で、軒には部材を示す表現はみられない。調査時には屋根の四隅が欠損していたが、1972年の記録では四隅に装飾が存在している。

次に、組物の表現に着目し比較分析を行い、表現対象について考察を行った。5号石棺だけが四隅の柱の上に組物があり、部材が桁行方向と梁行方向に突出した表現がされている。組物は、桁を柱位置から離し、屋根の軒の出を深くする機能を持つ。5号石棺はこの観点から、当初から屋根を持つ建物を模していたと考えられる。法隆寺玉虫厨子をはじめとして、仏堂に建物の雛形を置くことは古代からみられた形式であるが、特に内陣に須弥壇を置き、壇上に大型の仏像を納めた厨子を備える形式は長保寺など室町時代の仏堂に多くみられる⁹¹⁾。こうした厨子は入母屋造の屋根を持つことが多く、正面に両開きの扉を持つが、5号石棺の表現と一致する。5号石棺は仏舎利や仏像を納める厨子として意識されていたと考えられる。

2号と3号石棺にも組物は表現されているが、軒を出し桁を受ける表現ではない。1号、4号石棺に組物の表現はみられず、柱と礎盤以外の建築部材表現としては、4号石棺の頭貫とみられる表現だけである。このような構造であっても屋根をかけることは不可能ではなく、部材の表現が省略されていると考えることもできる。しか

し、礎盤、柱頭の部材は十分に意識されており、他の彫刻表現も粗雑ではなく、技術的な理由から省略されたとは考えにくい。

3号石棺の頭貫は仏像周辺の表現と干渉しあっており、当初から建築部材が表現されていたものではない可能性がある。この点で3号石棺は4号石棺とほぼ同形式といえる。四方を装飾された柱で囲まれ、仏像が並ぶ空間として、最も適当なものは建物そのものではないと考えたほうがよい。該当する空間として、仏堂内部または塔の内部の四天柱とそこに安置された仏像が挙げられ、特に一間四面堂に相当する可能性がある^{※12}。代表的な一間四面堂として中尊寺金色堂(1124年)が挙げられ、一間四方の母屋に仏壇が設けられる。平面は正方形で宝形造の屋根となり。12世紀から13世紀にも各地で同様の仏堂は建築されている。母屋に直接屋根がかけられることは違和感が残るが、中尊寺金色堂においても母屋部分だけにかかる切妻屋根はあり、さらに宝形造の屋根に覆われていることから、屋根は一重とは限らない。これらのことから、石棺は建築の外観を模しているのではなく、仏堂や塔の内部を表していると考えられないだろうか。

組物の表現から、5号石棺は仏堂内部の厨子または仏堂、1号から4号石棺は仏堂の母屋をそれぞれ表現しており、異なる意図のもとに製作されたと考えられる。

6号石棺の棺身には、建築的な構造部材が認められない。石材の色調と表現の独自性から、この石棺に関しては棺身と屋根は一体のものとして判断できる。屋根は、調査時には欠損していたが、1972年の実測図ではわずかに四隅末端に装飾的な突起を持ち、宝形造であったことがわかる。18世紀の首里城での儀礼を描く史料には、宝形造の屋根を持つ宣読台が描かれるほか、仮設の宴席も宝形造に描かれ、権威を示す形態とみなされていたものであろう^{※13}。

2-3. 浦添ようどれの石棺の建築表現による編年

石棺の屋根に表現された瓦による分析や、彫刻表現と技法に関して台座を含めた分析による編年が行われており、首里城正殿の瓦葺化など建築的な変化との対応関係の可能性も指摘されている^{※14}。しかしながら、製作時からの表現が最も多く含まれると考えられる、棺身の建築表現による編年が行われていない。

浦添ようどれには、製作年代の判明している石棺はない。このため、他の輝緑凝灰岩製石棺として知られている玉陵の石棺四基、小禄墓の石棺一基、伊是名玉御殿の石棺二基と建築表現を比較することにしたい。特に小禄墓石棺は輝緑凝灰岩製石棺のなかで唯一1494

年の銘が刻まれている^{※15}。この刻まれた年代が、被葬者の没年を示すだけのもので、石棺は後世に作成された可能性もあるが、製作と銘の差は数年程度だと仮定し話を進めたい。

棺身のみを建築表現を対象とし、石棺の表現を理解し着眼点を見いだす目的で、主な石棺について史料から把握できる建築部材のみを模式化し3D-CGを作成したところ、小禄墓石棺と5号石棺に共通点が認められた。石棺の3D-CGによる模式図一覧は表2に示す^{※16}。

小禄墓石棺は四隅の柱上部に突出した組物表現は持たないが、前面に連続する装飾的な組物が表現されている。5号石棺では背面の柱の上にも斗と実肘木とみられる部材がある。小禄墓石棺と5号石棺は、頭貫または貫の上に組物があり、桁が表現される点が共通している。また、小禄墓石棺と玉陵の四基と伊是名玉御殿の二基は、正面の貫の上に連続する組物や、側面に木鼻が表現されている点が共通している。しかし、これら六基はいずれも角柱であることや、正面に並ぶ組物の数が小禄墓とは異なる。

そこで、玉陵と伊是名玉御殿の石棺六基のなかでは四面すべての写真が確認できた尚円王石棺を対象として比較する。5号石棺、小禄墓石棺と尚円王石棺に共通する通肘木を受ける組物に着目し、トレース図を表3に示す。5号石棺背面中央には実肘木とみられる組物が表されている。小禄墓石棺正面の組物は双斗の肘木に装飾のある表現がされている。これに対して尚円王石棺では正面の平三斗を受ける束が左右に装飾を広げている。このように装飾的な部分でありながら、いずれも本蓋股の表現はみられない。本蓋股の普及が主に鎌倉時代とされ、南北朝時代からは双斗、花肘木へと移行する日本の寺院にみられる新和様の変化に対応すると考えられ^{※17}、判明している小禄墓石棺の年代にもほぼ合致する。3つの石棺の製作は5号石棺、小禄墓石棺、尚円王石棺の順といえる。

5号石棺が1号から4号石棺より建築表現として新しいことは、複雑な組物などの部材表現から明確である。2号石棺は当初から組物が表現されていたと考えられることから、1号石棺から4号石棺のなかでは最も新しいといえ、柱のみが表現されている1号石棺を最も古いと考えることが妥当ではある^{※18}。

3号石棺は2号石棺との共通点が多く、前後して製作されているといえる。4号石棺は頭貫の表現以外は1号石棺との類似点が多く、これが2号と3号石棺以降に製作されているとは考え難い。

以上の建築表現の比較から、浦添ようどれの石棺は1号、4号、3号、2号の順で製作された後、5号石棺が1494年以前に製作され、その後6号石棺が製作されたと考えられる。

表2 石棺の3D-CGによる模式図一覧 表3 組物表現の比較

3. 浦添ようどれの変遷と石棺の関係

3-1. 石棺の配置の変遷

1号から4号石棺正面には建築表現のほかに、3体から5体の像が彫刻されている。浦添ようどれ全体の変遷を明らかにするにあたり、石棺の、現在の配置が当初からの製作意図に従ったものであるかを知るには彫刻表現全体に着目する必要がある。

向かい合わせに配置され、建築表現にも共通点が多い2号石棺と3号石棺を比較すると、向かい合う面に二体の地藏菩薩とされる僧形の像、反対側に三体の像が表現されている。1号石棺と、2号、3号石棺で囲まれた空間が墓室の中心的な場所であると考えてよいことから、2号と3号石棺は地藏菩薩とされる像を正面として配置

されている。しかし、1号石棺では地藏菩薩とされる像は背面で、正面には阿弥陀三尊像とされる三体の仏像と、左右に二体の彫刻がみられる。2号、3号石棺の、背面として配置されている面には、中央に円環状の光背と螺髪頭の頭部、白豪が表現された像と、左右に頭部に装飾を持ち、持物のある像が表されており、これらも仏像と考えられ、製作意図としての正面が現在は背面となっているといえる。したがって、2号と3号石棺は製作時とは配置が異なると考えられる。また、4号石棺内の布が15世紀の製作、石積の整備と木棺の金具などの廃棄の時期が14世紀後半から15世紀前半とされ¹¹⁹⁾、5号石棺の製作が最も近い。2号石棺が整備に際して、3号石棺に即して製作されたものなのか、建物と唐櫃型木棺の廃棄以前に製作されていたものかを確かめる手段は乏しい。とはいえ、英祖王陵内では2号石棺が、現在の配置への整備がなされた時期に最も近い製作であることはいえる。

さらに仏像の表現に着目すると、1号と4号石棺では中央に三体の仏像がそれぞれ蓮の花の上に表現されており、両端にひとつずつ像が表現されている。1号と4号石棺で表現が共通している像は左端の像で、両手を胸の前で合わせ棒状の持物を水平に捧げている。合掌した姿で、剣などを水平に構える表現は韋駄天を表すものであることから、1号と4号石棺の左端は韋駄天像とみてよい¹²⁰⁾。右端の像はそれぞれの石棺で異なる表現がされており、1号石棺では右手に剣を持ち、左手を前に向けて開いて添えているが、4号石棺では右手に宝塔を掲げ、左手で槍を持つ。4号石棺の像の特徴は、多聞天または毘沙門天に相当し、単独であることから毘沙門天と考えてよいだろう。1号石棺が、4号石棺と同様の意図を持って製作されていたならば、多聞天または毘沙門天が表現されていると考えられるが、特徴は異なっている。そこで、現存している他の四天王像と比較したところ、戒壇院厨子扉の多聞天¹²¹⁾の、右手に剣を持ち、左手を手前に向けて広げて添える表現が一致する。よって、1号と4号石棺の右端は毘沙門天像と考えられる¹²²⁾。

四天王像は仏堂の四方の守護として、それぞれが対応する方角に配置される。また、朝鮮半島には対応する方角に四天王像が彫刻された石灯籠や石塔が多く現存している¹²³⁾。毘沙門天は北の守護とされ、像が北側に配置される意図で製作されたものであろう。4号石棺では毘沙門天像が北に位置するよう配置されているが、1号石棺の配置では毘沙門天像が西に位置している。したがって、1号石棺は製作当初からの配置ではないと考えられる。

次に、1号から4号石棺に共通している中央の三体の仏像を比較する。2号から4号石棺では、右側の像が右手に包子とみられる房状の持物を、左手に椿を持つことが共通しているが、1号石棺の中央右側の像は両手で茎の長い蓮の蕾を持つ。4号石棺の中央左側の像は損傷が激しいが、棒状のものを持つことがわかり、2号と3号石棺の左側の像は茎の長い蓮の蕾を持つことが共通するが、1号石棺中央左側の像の右手付近に水瓶の輪郭をみることができる。2号から4号石棺の三体の仏像には細部の表現に違いはあるが共通点が多く、1号石棺の独立性が高いことがわかる。

石棺の規模や、韋駄天と毘沙門天が両端に表現される形式は1号と4号石棺で共通しており、制作意図に共通点があったことが窺われる。しかし、毘沙門天の表現が異なり、韋駄天の持物が1号石棺では剣、4号石棺では宝棒の表現である点が異なり、それぞれに表

現の根拠が存在したものだろう¹²⁴⁾。

また、4号石棺にみられる、毘沙門天が持つ塔は石棺以外で唯一、同時代の建築を示す史料として着目すべきである。極端に反りのある屋根の頂部に装飾があり、塔身が亀腹とみられる曲線で表現された宝塔の形式で、方形の基壇上に表現されている。日本に現存する宝塔としては性海寺のものが鎌倉時代の様式とされており、須弥壇上に安置されている。多聞天像または毘沙門天像の持物の塔が宝塔である事例として、法隆寺大講堂多聞天像などが知られており、10世紀ごろの製作とされる。宝塔と多聞天像や毘沙門天像との関連付けが、現存する主な宝塔の建築年代が鎌倉時代から室町時代までが中心であったことと一致すると明確な判断はできないが、仏像と関連付けられる建築表現も、石棺の製作年代を明らかにする大きな手がかりとなりえる。英祖王の没年は1299年と伝えられており、日本に現存する宝塔の多くが製作された時代から大きく隔たつてはいない¹²⁵⁾。

以上で述べたように、像の表現からは1号石棺が2号から4号石棺とは別に製作されたといえるが、英祖王陵では1号から3号石棺が一組として配置されている。その配置も、製作された時点での正面が意識された配置とは考えにくい。これらの実態から、石棺は製作と配置が別に行われたと指摘できそうである。

石棺の配置の変化は、墓室の変遷と無縁ではないだろう。二つの墓室の平面を図1に示したが、彫刻表現の意図する方角に即して配置されている4号石棺の前には、白石の厨子が設置されていたごく低い土の壇がある。現在の墓室の構成として、東側が正面として整備されているといえそうであるが、入口は北側に開かれている。英祖王陵の入口も北に向かって開かれており、1号石棺の正面も北に向けられ。二つの墓室の正面はどちらも入口のある北側とされるが、イチ(池)と呼ばれる副室の入口が開く方向が異なっている。同様に副室を持つ玉陵と比較すると、東室では規模が小さい副室の入口は墓室の正面と同じ方向に開き、英祖王陵の状況と一致している。尚寧王陵の副室の入口は、4号石棺の正面と同じ方向に向けて開いており、墓室の正面は入口のある北側ではなく、東側だと考えることができるから、4号石棺はやはり製作当初から尚寧王陵に配置されていたと考えてよいだろう¹²⁶⁾。

現在の配置に石棺が置かれた時期は、2号と3号石棺が礎石と干渉する位置にあるため、礎石の上の建物が廃棄された後である。廃棄された瓦の周辺から発掘された金具などから、王陵内の建物と同時期に唐櫃型木棺が存在したと考えられており、石棺の製作時期にも考慮しなくてはならない。しかし、4号石棺について述べたとおり、石棺が尚寧王陵に設置されていたとすれば、石棺と王陵内の建物や木棺は排他的な存在ではない。英祖王陵内の石棺が現在の配置となった時期が王陵内建物と木棺の廃棄後だとしても、石棺の製作時期とは別に考える必要があるだろう。

3-2. 浦添ようどれの変遷

石棺が製作時から配置に変化があったとすれば、浦添ようどれ全体の整備を反映していると考えられる。大規模な整備が行われた時期と、整備の内容から浦添ようどれの変遷を把握することができるだろう。

礎石は現在の壁の下にあることから、王陵内の礎石建物が存在し

ていた状態では前面は開けられていたといえる。この建物の礎石の下に粗い栗石が詰められていることを調査時に確認したが、これは建築当初から相当の加重がかかることが想定されていたはずで、建物の屋根は当初から瓦葺であったと考えられる。

英祖王陵内に瓦葺屋根の建物が存在していた際、前庭を囲む牆壁も並存していたかどうかを検証する必要がある。庭を囲む牆壁が設けられている王陵としては玉陵が挙げられる。玉陵の造営は1501年であることが、玉陵前の石碑に記されており、瓦葺屋根の建物が存在した時期より後である。そこで、玉陵以前の王陵である、第一尚氏の墓所といわれる天山陵、第一尚氏初代の尚巴志の父の墓と伝えられる佐敷ようどれ、第一尚氏以前からの北山監守の墓とされる今帰仁百按司墓を比較対象とする。

佐敷ようどれは18世紀に現在の場所に移設されたことが知られており、本来は佐敷グスクの崖下に造営されたことが伝えられている。正確な位置は不明であるが、崩落したとされる場所は周辺の平地から非常によく見えることを調査時に確認した。同様に、浦添ようどれの位置も浦添グスクの崖下であり、牧港湾からよく見える位置にあり、前庭から市街地と湾が一望できる立地であると考えられる。

佐敷ようどれより古いとされる今帰仁百按司墓は、現在では樹木に覆われて前面が見通せないが、樹木の間から、運天港を見渡せる位置にある。崖に開いた穴が墓室として使用され、前面は当初から覆われておらず、現在の塀は近代以降の造作であることが知られている。

天山陵は第二次世界大戦中に破壊されており全貌は明らかではないが、開けた場所に面していない。比較対象とした王陵のうち、玉陵と最も造営時期が近いものは第一尚氏の王陵であった天山陵であり、天山陵造営時期の前後で王陵の形式に変化があったことが窺われる。瓦葺屋根建物が存在した時期の英祖王陵は、開けた見通しのよい場所に設けられる形式の王陵の年代に属しており、現在のような牆壁は設けられていないと考えてよい。したがって、英祖王陵に石棺が配置された際、同時に前面が壁で覆われたとは考えにくい。壁と、2号と3号石棺の位置に着目すると、入口の開口部は1号石棺の正面ほぼ中央に向けて開かれ、2号と3号石棺の彫刻もよく見えるように配置されているが、壁側の面は彫刻の確認が難しいほど接近しており、不自然といえる。この実態から、石棺が配置された当初は前面が壁で覆われていなかったと考えられる。

浦添ようどれ全体が牆壁で囲まれる以前の英祖王陵の変遷をまとめると、①瓦葺屋根の建物が存在し前面が開けていた時期、②瓦葺屋根の建物が廃棄され石棺が配置され前面が開けていた時期、③墓室入口が壁で覆われた時期に分けることができる。

浦添ようどれに残る石碑には、尚寧王が英祖王の後継者として父祖の墓を浦添ようどれに整備したことが記されている。尚寧王の父と祖父の石棺は白石の厨子のひとつと伝えられており、尚寧王陵の整備は尚寧王の存命中であると考えてよい。尚寧王は生年が1564年、在位は1588年から1620年に没するまでであるから、英祖王陵の建物の破棄と石棺の配置時期は尚寧王の時代ではない。可能性があるのは、英祖王陵の入口を壁で塞ぐ事、全体を牆壁で囲む事である。玉陵の石棺も含めて、尚寧王の前後の時代に製作されている石棺はすべて石灰岩製の小型石棺であり、写真から判断する限りでは

尚寧王陵内の白石の厨子が最も製作年代が近いといえる。碑文がようどれ全体に言及していること、16世紀末に倭寇に備えたとされる石牆が首里城に築かれていること、伊是名玉御殿が石積に改修された時期が1688年とされていることから、浦添ようどれ全体を牆壁で囲むと同時に、英祖王陵入口を壁で塞ぐ整備が、尚寧王の時代のものと考えられる。

また、尚寧王の時代以降に、改修や補修が行われた可能性も考えられる。1700年に今帰仁グスク崖下にあったと伝えられる北山監守の墓である大北墓(うーにしばか)が崖の崩落により現在地に移設され、佐敷ようどれの移設が1764年と記録されている。これらの墓の移設は第二尚氏の王たちにより、国家事業としてなされたことが記録されている^{注27)}。18世紀ごろに製作年代が最も近いと考えられる石棺は6号石棺であり、全国的な整備事業のなかで尚寧王陵に加えられた可能性が指摘できる。

4. 英祖王陵内瓦葺屋根建物の復元

石棺の建築表現の分析であきらかなように、組物などの建築技法は日本との関係が深いことがいえるだろう。棺身の仏像も日本での阿弥陀信仰との関連が窺え、特に韋駄天像の表現は日本で知られている形式に従っている。石棺の材料が中国福建省産であることや、発掘された瓦が高麗の形式であることが知られているが、建物の構造はむしろ日本の形式に近似していると考えてよいのではないか。

英祖王陵内の礎石の実測からは、礎石の中心間の距離は7尺から8尺の間で一定しないことがわかる。柱心が礎石中心に一致しなくてもよいと考えて、一間を7尺として復元を試みる。この場合、柱は直径が六寸程度であれば礎石に収まる。棟は墓室の高さで規定されるから、最も高いところで約3mとなる。屋根は礎石と壁の位置関係から平入切妻と考えることが自然であり、軒の出は、背面の岩壁との距離で規定される。

重量のある瓦屋根を維持できる構造を備えていなくてはならないため、仮設的な覆屋ではないといえる。1号から4号の石棺が併存していた可能性があること、石棺の彫刻の特徴から、墓室内建物には鎌倉時代以前の様式が用いられていたと推測することができる。

以上のことから考えて、建物は、二間二間の方形平面で、柱間7尺、棟高約3m、本瓦葺、平入切妻屋根で、このような特徴を備えた13世紀ごろまでの事例をもとに復元案を作成することは可能であろう。図2に英祖王陵内の礎石概形と柱の配置を示す。

図2 英祖王陵内の礎石概形と柱の配置

5. 結論

浦添ようどれの四基の輝緑凝灰岩製大型石棺と二基の小型石棺の編年の結果、浦添ようどれの石棺棺身は1号、4号、3号、2号、

5号、6号の順で製作されたと考えられる。組物の表現や、仏像の特徴など、1号から4号石棺には鎌倉時代の日本の事例と共通する表現が多くみられる。仏像表現の比較からは、根拠がそれぞれ別に求められていたことが窺われ、高い関心が持たれていたと思われる。

1号から4号石棺は、以降に製作された石棺とは模した対象が異なり、その製作意図の違いから第二尚氏の時代に製作されたとは考えにくい。英祖王陵内建物の廃棄と石棺の配置も、第一尚氏以前に行われた整備といえるが、石棺が製作された時代の王は不明である。浦添ようどれは英祖王の造営と伝えられるが、王統の血縁関係は幾度か断絶していることが明らかになっている^{注28)}。にもかかわらず、第二尚氏の時代にも英祖王の墓所として祀られ続け、王の尊称にも英祖王の名が掲げられ^{注29)}、琉球王朝と王権のあり方に大きな位置を占めていたといえよう^{注30)}。

建築表現や仏像の表現からは、推測される製作年代における日本では最先端の意匠が採用されており、石棺が製作された時代に琉球王国が備えていた影響力や文化的地位は、従来から知られている明との冊封体制だけで説明しきれものではない。1号から4号の石棺の具体的な製作年代や製作者を特定するには、石棺そのものが最も情報量が多く、確実な史料であり、棺身に彫刻された仏像に関してもより詳細な検討が必要と考える。

石棺には、材料の輝緑凝灰岩が中国産であることなど、中国からの影響が大きく指摘されている。高麗系の瓦や、石造寺院施設との類似性から、朝鮮半島の影響を無視することもできない。しかし、組物などの建築表現からは、むしろ主に日本との関係が深く、日本での建築様式の変化に対応していると考えられる表現があることが明らかとなった。琉球の貿易中継国としての繁栄は、特定の一カ国、一地域だけとの関係で説明できるものではなく、建築についてもより広い範囲からの影響を想定した考察が必要であると考えられる。

謝辞 浦添市教育委員会文化課の安里進氏には調査の機会のみならず、王陵の変遷などについて多大なご示唆を頂きました。浦添市教育委員会文化課の皆様にもお世話になりました。実測調査に際しては玉井哲雄先生、揚村固先生ほか、千葉大学玉井研究室 OB の前原信達氏、松嶋秀也氏にご協力いただきました。いずれも、深く感謝いたします。

注

- 注 1) この他に白石の厨子と呼ばれる数基の石棺が存在したが、損傷が激しく、調査時には撤去されており調査していない。
- 注 2) 浦添市教育委員会：蘇る琉球国中山王陵浦添ようどれ 2000.10 改定 2002.3
- 注 3) 2003年9月17日の千葉大学玉井研究室の調査に参加し、2004年3月19日～20日の浦添市教育委員会文化課巡検に参加したものである。
- 注 4) 又吉真三：浦添世潯(ようとれ)陵総合調査 沖縄県教育庁文化課蔵 1973.6
- 注 5) 文化財建造物保存技術協会編：重要文化財玉陵復原修理工事報告書 重要文化財玉陵復原修理委員会 1978.9
- 注 6) 稲葉和也：古代中国建築の木構造の成立過程について（漢代建築の復原的研究—その8）日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠 pp.1969～1970 1980.9
- 注 7) 小林孝二、遠藤 明久：松前家藩公墓所石造屋形について 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.2203～2204 1981.9
- 注 8) 浦添市教育委員会文化課：浦添ようどれ見学会パンフレット 2002.8

- 注 9) 浦添世潯(ようとれ)陵総合調査 前掲史料と、実測調査結果から作成した。図2も同様。
- 注 10) 4号石棺右下は手前に5号石棺があり適当な写真が得られていない。その他、写真撮影が困難な面、損傷により輪郭線を検出することが困難であった面の図は省略した。
- 注 11) 太田博太郎編：日本建築史基礎資料集成四仏堂 I 中央公論美術出版社 1981.1
- 注 12) 山岸常人：中世寺院社会と仏堂 塙書房 1990.2 富貴寺大堂床下の大石と穴から、墓堂であった可能性が指摘されている。中尊寺金色堂と同時期の一間四面堂としては、願成寺阿弥陀堂(1160年)、高蔵寺阿弥陀堂(1177年)などが知られている。
- 注 13) 鎌倉芳太郎：沖縄文化の至宝(二分冊) 岩波書店 1982.10 「首里城 正殿前城元仲秋宴設営絵図」と「首里城 正殿前城元設営図」
- 注 14) 上原静：輝緑岩製石棺にみる屋根瓦 琉球・東アジアの人と文化 高宮廣衛先生古希記念論集 上巻 pp.315～342 高宮廣衛先生古希記念論文集刊行会 2000.10
- 注 15) 沖縄県教育委員会：沖縄の文化財 III 沖縄県立博物館友の会 1997.6 「弘治七年 おろく大やくもい 六月吉日」の銘がある。弘治七年は1494年にあたる。
- 注 16) 南風原町(沖縄県)、那覇出版社：沖縄文化財百科 第一巻 建造物・美術工芸 那覇出版社 1988.5 小禄墓石棺側面の写真を確認した。なお、未確認の面の部材は薄く表示している。
- 注 17) 伊藤延男、小林剛：中世寺院と鎌倉彫刻 原色日本の美術9 小学館 1968.
- 注 18) 又吉真三氏の調査記録から棺身柱芯間の長辺と短辺の比を求めたところ、1号石棺から順に1:2.1、1:2、1:2、1:2.24、1:1.36である。製作年代が新しいほど両柱間の差が小さくなる傾向にあるとすれば、1号と4号は逆転している。
- 注 19) 浦添市教育委員会：浦添ようどれ I 石積遺構編-史跡浦添城跡整備事業に伴う発掘調査報告- 2001.3
浦添市教育委員会：ようどれ石厨子と遺骨の分析結果について 2003.6
- 注 20) 真鍋俊照編：日本仏像事典 吉川弘文館 2004.12 章駄天は南方守護の増長天配下で、日本では宝剣または宝棒を水平に構え合掌する姿に造られ、鎌倉時代に中国から伝わったものとされる。伽藍の守護、特に禅宗寺院の庫裡にまつられる。
- 注 21) 水野敬三郎監：カラー版日本仏像史 美術出版社 2001.5 高山寺旧蔵、戒壇院厨子扉絵四天王像の多聞天。
- 注 22) 錦織亮介：天部の仏像事典 東京美術 1983.11 多聞天像、毘沙門天像は塔を持つものが多いが、持物や形態は必ずしも一定しない。
- 注 23) 高裕燮：朝鮮塔婆の研究 吉川弘文館 1978.9
黄壽永編：韓国美術全集(日本語版) 6石塔 同和出版公社 1974.7 日本語版 1974.11
仏教寺院伽藍の中心に木造建築を模した石造の塔婆(塔)が現存しており、特に敬天寺十層石塔(14世紀)、円覚寺址十層石塔(朝鮮初期)などで仏像とともに屋根、瓦、組物、柱などの建築表現がみられる。
- 注 24) 久野健編：仏像集成2日本の仏像<中部> 学生社 1992.1 鎌倉時代の作とされる乙津寺章駄天像の持物は宝棒である。
- 注 25) 太田博太郎編：日本建築史基礎資料集成十二塔婆 II 中央公論美術出版社 1999.11
- 注 26) ただし、この時点での尚寧王陵が現在と同じ状態であるかは不明。
- 注 27) 重要文化財玉陵復原修理工事報告書 前掲書
- 注 28) 原田禹雄：琉球と中国 忘れられた冊封使 吉川弘文館 2003.5
- 注 29) 外間守善校注：おもしろうし 上、下 岩波書店 2000.11 「英祖にや末按司襲い」、「英祖にや真末按司襲い」など、王の尊称として英祖王の末裔であることを讃える表現が繰返し表れる。
- 注 30) 安里進：琉球王国の形成と東アジア 日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界 吉川弘文館 pp.84～115 2003.11 英祖王は伝承とされることもあったが、発掘成果からは実在を認められるとされる。

(2005年7月8日原稿受理, 2005年10月31日採用決定)